

あさのめ新聞

ともに生きる



無所属 浅野目 義英 埼玉県議会活動報告 2023.2月号

埼玉の課題がコロナ禍で顕在化

新型コロナウイルスは、日本や世界の風景を急速に変えてしまいました。あまりにも多く存在する課題ですが、今何が起きているのか、コロナ禍後の社会はどうなるのかを見つめなければなりません。そのためには、コロナ禍が気づかせてくれた課題を期待されるイノベーションで、私たちは新しい社会像として創造しなければなりません。

コロナ禍を通じて顕在化した課題

<p>コロナ禍の日常生活の長期にわたる変化に伴って、高齢者、障害者、子どもたちへの影響の課題。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●高齢者の心と体の働きが弱くなっている、また認知の低下 ●障害者の交流機会が減少 ●親以外の大人との交流が減った子どもの生活 ●発達障害のある学生の生活リズムが一変 ●表情がみえにくいマスク生活、子どもの発達に悪影響 ●マスク全体主義のまん延など 	<p>これまで把握されていなかったが、コロナ禍で顕在化した新たな生活課題。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ギリギリで生活できていた世帯の不安定な状態 ●上記のような世帯が抱えていた複合的な課題 ●親族の手助けが不可欠だった子育て家庭の実態 ●外国籍の居住者の生活実態 ●相談機関を知らなかったり、相談が苦手な人たちの多さの露呈 ●ひきこもりなどの複合的な課題の表面化 ●出生率の減少=人口減少など 	<p>地域活動の担い手と今後の活動のあり方への影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地域活動の停止による活動者のモチベーションの低下 ●町会等の交流行事の停止に伴う地縁関係や一体感の希薄化 ●日中、地域にいたり、地域に関心のある人は増えたのに既存の活動につながらない ●中高校生のボランティア活動の機会の減少など 	<p>情報格差への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ●デジタルスキルの世代間の差 ●外国籍居住者の言葉の課題 ●テレワークの利用が所得格差に連動 ●デジタル格差を通じて経済的格差の広がり ●デジタルは教育を進化させるが、格差も生むといった実態 ●情報格差が社会の分断を加速など
---	---	---	--

(東京都福祉保健局の資料などを中心に浅野目が作成)

浦和駅方面から伸びてきて中山道をクロスし国道17号へ至る田島大牧線は昨年三月に開通しました。県庁通りや周辺道路などの交通渋滞解消につながるものと歓迎されました。一方、岸町常盤線との交差点には、横断歩道と歩行者用信号がなく、岸町七丁目内外の方々から「安全のための施策を進めて欲しい」とのお声が届けられました。埼玉県警察本部の交通規制課また小柳嘉文市議とも協議を重ねました。

横断歩道の設置は12月19日に、押しボタン式信号機は同日13時に点灯され運用開始となりました。地域の安全性が高まりました。

浦和区岸町 横断歩道、歩行者用信号機設置

浦和区岸町 浦和針ヶ谷 劣化した交通標識柱、信号制御機は危険一刻も早く撤去、そして新設

「あの鉄柱は錆だらけで不安」「倒壊の恐れがある」など針ヶ谷二丁目自治会の方々からお声が届けられました。埼玉県道路環境課との協議が進められ、錆だらけでポロポロになった交通標識柱が撤去されました。大原陸橋東側交差点に立っていたこの鉄柱。倒れたら大変なことになるどころでした。交通標識柱のみならず、県内には1万326基の信号制御機があります。耐用年数は約19年ですが、これを超えているものが3497基、設置後25年を経過しているものも699基残っています。一刻も早く撤去、新設される必要があります。



あさのめ 埼玉県議会 全報告完成

挑戦、改革、実行力 古い政治を変える私の誓い

(全報告冒頭文より)

間もなく、埼玉県議会議員としての私の任期が終え、これまでも毎任期終了時に行ってきたが、今回も「全報告」を出させて頂いた。投票により私へ与えて頂いた4年間の任期。この間に果たさせて頂いた仕事の報告と解説をすることは、やり遂げなければならぬ義務だと思っっている。ネット上でのコミュニケーションが増えてきた。スピードがあり、言葉に軽さやノリが求められている。だから、私の周りにも冊子での「全報告」を出すことに否定的な意見もあった。しかし、

私が36ページの文章をしたため、レイアウトを決め、写真を撮り、完成にこぎつけた。丁寧な言葉で伝えることは大切だと思っっている。議員として活動していると、よく「これは絶対に何とかしなければならぬ」と感じることもある。大義は私の大切にしていく価値の一つだが、動かなければならないというどうしようもない衝動力で私は動いてきた。

不条理に立ち向かう人と共に戦い、より良い未来を先取りする決意を貫いてきた。人々の生活には様々なドラマがある。その一つひとつにきちんと応えようと仕事を果たしてきた。この冊子はその全ての記録だ。



(プロフィール)

昭和33年5月27日東京生まれ。山形県米沢市育ち。法政大学社会学部卒。小学校教員を経て。隣接の上尾市で全国最年少25歳で市議初当選。市議4期(25~41歳)。37歳で全国最年少議長。上尾市長選挙次点敗退。政治浪人7年。平成19年埼玉県議会議員(浦和区)トップで初当選。以後4期連続当選。



全36ページ

【お願い】ご希望の方は、下記あさのめ事務所までご連絡頂ければ嬉しく存じます。こちらからお送り申し上げます。

第22回 あさのめ県政報告会 「ともに生きる」総決起大会

2023年 令和5年 3月11日

ロイヤルパインズホテル 浦和4階

開会 14時30分
報告 15時00分
閉会 16時30分

埼玉県議会議員 あさのめ事務所

無所属 浅野目 義英

〒330-0074 さいたま市浦和区北浦和 2-3-2

☎ 048-762-7133 ☎ 048-762-7144

✉ urawajimu@asanome.com 🌐 www.asanome.com



未来社会
の実現

分身ロボット「オリヒメ」を、 けやき特別支援学校に複数台導入せよ



20世紀を代表する思想家、ハイエクは次のように語っている。

「体の弱い子供が、ある社会においては、他の社会よりも多く生き延びるチャンスを持つているかどうかどうかは、その社会の構造に関わることだ。」

この言葉は、分身ロボット「オリヒメ」の存在意義と役割の背中を強く押ししている。



「オリヒメ」を使った授業風景（県立けやき特別支援学校）

を一体何台持っているのだろうか、そう思い一生懸命、県庁の中を探した。たった1台だけ見つかった。写真を用意してきた。大変小さな鳥の形をしたロボットだ。この場所は、けやき特別支援学校の教室の中。1台だけあった。

余命の限られた難病の子供、重篤な病気や大けがで、治療を余儀なくされている子供が、小児医療センターに入院をしている。正に、体の弱い子供だ。同センターから併設されているけやき特別支援学校へ、学ぶために毎日通っている。しかし、治療のためにベッドから動けない、髪の毛が抜け落ちた姿形を誰にも見られたくない、こういった理由で、けやき特別支援学校に通えない子供たちも少なからずいることを私たちは知るべきだ。教育の機会均等から外れがちな子供たちがいるということだ。

る。ベッドから先生の話を聞き、自分の発言をし、クラスメイトの声を聞き、手を振る、目を光らせるなど、自分の体のように動かすことができる。有名になったロボットだ。遠隔で意思疎通ができるなどの優位性が認められ、ベッドの上からでも、まるで教室にいるのと同じ感情の同期ができて、学習に取り組むことができる。時代は、ここまで来たのだ。

分身ロボットの意義は大きいことから、複数台整備する必要があり、私は思う。このことを強く求めたい。

教育長

このロボットの活用で、入院中の児童生徒がまるで教室にいるかのように授業に参加したり、クラスメイトとコミュニケーションをとることが可能となった。また、以前在籍していた学校に配置し、入院前のクラスメイトと交流し、円滑に復学する準備にも活用している。

小児がんなどの重篤な病気や大けがで入院を余儀なくされている児童生徒が在籍している特別支援学校で「オリヒメ」などのロボットを活用する教育的意義は大きい。



令和4年から、熊谷特別支援学校、川島ひばりが丘特別支援学校でも導入が決まった。

用語解説

埼玉県立けやき特別支援学校とは…平成29年、埼玉県立小児医療センターは、さいたま日赤病院と合築新設された。同センターに入院している小中学生が、学習するための病弱特別支援学校。同センター7階に開校している。体調や治療に合わせて学習が進められ、注射などの治療が必要な場合や昼食時にはエレベーターで学校と病棟との間を効率よく行き来することができるようになっている。入院前と変わらず学校生活を送れるように、また退院後に元の学校へスムーズに復帰できるように、さまざまな配慮がされている。



右・さいたま日赤病院 左・県立小児医療センター

ALSなど重度身体障害の方の生きる力に活用せよ



ALSは、徐々に全身の筋力が弱くなる病気だ。

自分で食事や呼吸ができなくなる。治療法は対症療法開の呼吸器装着しかない。装着しなければ死を意味するし、装着すれば生を手の中に入れることはできない。けれども、絶え間のない絶望から離れることはできない。

患者さんは、埼玉県で535人、日本では約1万人。呼吸器をつけなければ生きられない、つけなければ生きられない。延命希望の方は2割台。理由は先ほど話した通り。執行部の皆さん、呼吸器をつけるか。厳しい現実



分身ロボット「OriHime」

吉藤健太郎氏（35）が学生時代に開発した遠隔でコミュニケーションができるロボット。カメラ、マイク、スピーカーが搭載されている。様々な名称で呼ばれるが、ここでは「オリヒメ」と統一した。医療、教育、テレワークなどで活用が進められている。

を前に、私は肅然とさせられる。希望の光、就労の光、生きがいの光をどうやってたかざすことができるのだろうか、私はいつも思う。群馬県庁は総務部財産有効活用課が主導し、ALSなど重度障害の方が自宅等から「オリヒメ」を遠隔操作し、県庁32階のカフェのスタンプとして働いている。※下段写真参照



カフェで活躍する「オリヒメ」（群馬県庁 32F）

東京都港区は障害者福祉課が主導し、7月から、重度障害などで働くことが難しい方を対象に、区役所1階の福祉売店で、「オリヒメ」を使った就労機会の創出事業が始められている。

我々が目指さなければならぬ未来社会は、重度身体障害者でも、難病でも、様々な理由で家から出られない人でも子供でも、存在や役割を得て、誰かに必要とされている、自分は人のためにならなくて、自分は生きていくを自覚でき、自分を否定しなくなる社会ではないか。

通勤が難しくても、ベッドの上でも、在宅なら働ける。そういったALS患者さん、肢体不自由の方も多いため、移動が不可能でも、行きたい場所、行かなければならない場所に、この「オリヒメ」を置けば、その場にいるかのようなコミュニケーションが可能で、就

福祉部

新しいテクノロジーを活用した、障害者の方々の絶望から脱却した社会参画、就労の支援を埼玉県として行うことで、共生社会の実現を図ることはできないか、新しいロールモデルを構築できないか、答弁を求めたい。

議員お話しした通り、重い障害があっても社会参加や就労につながることで、希望や生きがいを持つことができる。それは、誰一人取り残さない社会の実現につながるものだ。県は、「オリヒメ」をデジタル技術を活用した障害者の社会参画促進の方策の一つとして研究していく。民間や他県の活用例を把握し、ロボット開発者、障害当事者、就労継続支援事業所、企業の方々の意見をお聞きし、県デジタルトランスフォーメーション推進計画を踏まえた具体



玉皇しごとセンター（さいたま市南区ラムザタワー3階）は、埼玉県就業支援と国の

ハローワークが一体化した「就職活動」を全面的にサポートする施設。ここに、オリヒメが設置されることになった。ここで、利用者の方に、検温・手指消毒の御協力をお願い、利用目的に合わせた対応窓口の御案内、セミナーや企業面接会の参加者に対して、開始前の連絡事項の説明などを行うとのことだ。



新しく設置が決まり、稼働しているオリヒメ「埼玉しごとセンター」（さいたま市南区のラムザタワー）

実現